

AAP

# 8月にフォーラム開催

## アジア生産をSC視点で

アジア・アパレルものづくりネットワーク(AAP)は2018年度に年6回の例会とともに、「2018AAPフォーラム(8月)」と「2019AAP展示会(来年1月)」を開く。10月の最現地視察ミッションはインドに派遣する。チャイナ・フランス・ワンとしての東南アジアを中心とした縫製は新たな段階を迎えており、サポートインダストリーを含めたサプライチェーン体制が重要になっていく。

「メード・バイ・ジャパン」は受注増が続いており、年間数千万着を生産する。会員(59社)はパングラデシュ、ミャンマー、ベトナム、カンボジア、ラオス、インドネシアに拠点を持つ。来年には、賃金が安くインフレが抑制されているラオスで生産する企業も出てきそうだ。

「安さを追って東南アジアのローカル企業で生産すると約3割が不良品となり、経費増が発注者の悩み。一方、AAPはセレクト系などある程度ボリュームのある生産に適する。日系だから生地の検反も行う。最近では百貨店も興味を持っていて(事務局)と言う。AAP会員の「東南アジア生産は各国で基礎が固まり、第2、第3工場開設に動く」段階に発展している。

しかし、「縫製の発注が多くても、日本生地は原料確保や染色加工スペースがネックとなり、追加生産できない状況。パングラデシュは来料加工(委託加工貿易)ができなくなる問題がある」と

し、生産基地とアイテムの住み分けなどが今後進みそうだ。そうした中で、2018AAPフォーラムは8月2日、メルパルク東京(東京都港区)で開催する。テーマは「アジアでメード・バイ・ジャパンを進化させるAAPとサポートインダストリーとともに」。アパレル生産は縫製工場だけでなく、サポートインダストリーが構築されてはじめてサプライチェーンが成り立つという観点で企画した。

基調講演では、UKIの本間君雄理事が「ミシンメーカーから見たアジア縫製事情とスマート化の取り組み」をテーマに講演。パネルディスカッションでは、縫製工場(サ

ンアイ、小島衣料)、検品加工(ラファクションクロスルシマ)、素材(サンウェル)、副資材(清川)、を話す。

国際物流(大森畑酒造)が、それぞれの立場から進化の現状、問題点などを話す。

参加費は無料で、定員は200人。申し込みはAAPホームページで受け付ける。